明治維新150周年カウントダウン企画

薩摩藩英國留學生同行記

Record of Satsuma Students Travel Companions

米国へ新しい可能性を求めて

参考資料／薩藩海軍史,薩摩藩英国留学生

画／竹添 星児　本文監修／東川 隆太郎

第6回 全6回

薩摩藩英国留学生が薩摩を出発してから四年。日本では明治政府が設立され薩摩藩の人材が日本の中枢で活躍するなか、英国で勉学に励んでいた留学生らは、今、新しい可能性を求めて米国へ渡っている。

ハリスの薫陶と渡米の決意

慶応三(一八六七)年の巴里万国博覧会で、薩摩藩は雄藩としての存在を世界に強く印象づけた。一方でフランス貴族モンブランと五代友厚らが下準備を行っていた欧州貿易のための商社設立の交渉は難航し、最終的に契約締結には至らなかった。これは薩摩藩の財政上の理由もあるが、一つには英国留学生らが同年七月に薩摩藩に提出した建言書の存在があるようだ。留学生らはモンブランに不信を抱いており、薩摩藩に彼との交渉を中止するように要請していたという。

留学生らがそのような建言を行った影には、英国で彼らを世話していたオリファントと、アメリカの宗教家ハリスの影響がある。督学として留学生をまとめていた町田久成が同年五月に帰国した後、残った留学生らはオリファントを頼ることとなり、彼の元を訪れていたハリスの薫陶を受けた。留学生らは二年ほどの留学生活のなかで、西洋の文明の素晴らしさだけではなく、西洋各国にもさまざまな争いや問題があるということに気付きはじめていた。そんな彼らにとって、ハリスの説く文明と自我を捨てた生活は、深く感銘をおぼえるものだったようだ。

特にスコットランドで学んでいた長沢鼎は国元の父にも英文で手紙を送るほど英国の暮らしになじんでおり、キリスト教の洗礼も受けていたため、他の留学生よりも深くハリスの教えを理解していたようだ。

留学資金の不足と、親身に世話をしてくれていたオリファントが渡米することもあり、大学の夏季休暇を前に留学生らは自らも渡米を決意する。慶応三(一八六七)年八月、畠山義成、松村淳蔵、

六人の留学生は新しい可能性を求めて米国へ旅立った。

長沢 鼎（ながさわ かなえ）

〈嘉永5(1852)年－昭和9(1934)年〉

最年少の薩摩藩英国留学生として英国で学んだのち、宗教家ハリスの薫陶を受けて米国に渡り、カリフォルニアでワイナリー経営に従事する。教団解散後はワイナリーを引き継ぎ、カリフォルニアのぶどう王として富を築いた。

写真：鹿児島県立図書館 蔵

鮫島 尚信（さめしま なおのぶ）

〈弘化2(1845)年－明治13(1880)年〉

薩摩藩英国留学生として英米留学の後、帰国後は明治政府の外交官として外国官権判事や外務大輔、欧州各国の公使などを歴任。在仏特命全権公使としてパリ在任中に病に倒れ、35歳の若さで没した。

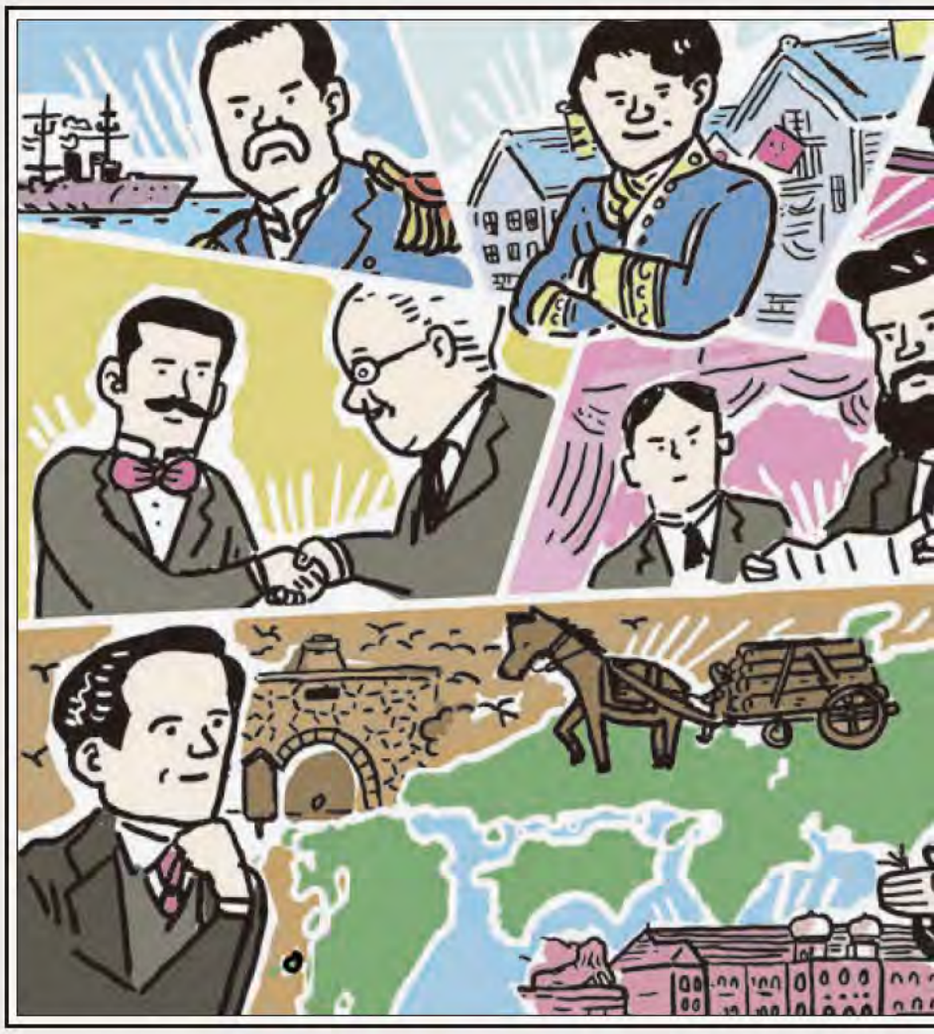
写真：鹿児島県立図書館 蔵

畠山 義成（はたけやま よしなり）

〈天保13(1842)年－明治9(1876)年〉

薩摩藩英国留学生として英米留学の後、岩倉具視全権大使の随員として再び渡欧。その後教育行政に携わり、東京開成学校や東京外国語学校の校長、東京書籍館や東京博物館の館長を歴任した。

写真：鹿児島県立図書館 蔵



森有礼（もりありのり）、鮫島尚信（さめしまなおのぶ）、吉田清成（よしだきよなり）、長沢鼎の六人は、まだ見ぬ米国へ、新しい可能性を求めて旅立った。

新天地アメリカ 留学生のその後

新天地での生活を始めた留学生らだが、農業を中心とした肉体労働が中心の生活は楽なものではなかった。しばらくはコロニー(※1)に暮らしていたが、慶応四(一八六八)年春には畠山、松村、吉田の三人がコロニーを脱退することとなった。これは、日本という祖国を大事に考える留学生らと、神の意志の前には国は重要ではないと考えるハリスとの意見の食い違いによるもののようだ。しかしハリスも留学生らの考えには一定の理解を示していたようで、その後日本で戊辰戦争が起こったことを知ったハリスは、森と鮫島に国の再建のために日本へ帰国するよう勧めた。動乱の日本に身を投じることを決意した二人は、同年六月に帰国し、翌月から新政府の外交官として精力的に腕を奮っているという。畠山、村松、吉田の三人も、日本でその知識を生かすべく、九月から米国の大学に入り法律や政治経済を学んでいる。

長沢は、ただ一人コロニーに残ったが、十三歳という若さで渡英した長沢は特に西洋の文化に順応しており、ハリスの教えと事業手腕を着々と身に着けているようである。

元治二(一八六五)年に薩摩を出発した留学生らだが、この数年で彼ら自身や日本がこれほど変化するとは誰も予測し得なかっただろう。広い世界に触れてさまざまな学びを得た彼らは、国内外で着々と自らの道を歩みはじめている。彼らの活躍は、必ずこれからの日本に、大きな影響を与えてくれることだろう。

コロニーではブドウ栽培に従事した。

※本紙は薩摩藩英国留学生の当時の様子を紹介する企画です。本文中の時間は新暦とします。

(※1)ハリスが組織していた生活共同体。私有財産は認められず、労働奉仕を中心とした共同生活が営まれた。